メディア業界における産学連携の実践とその教育効果Ⅰ

── bayfm 学生ラジオレポーター　研究ノートⅠ ──

小　倉　　淳*

1. はじめに

“産学連携”という言葉が世間に認知され始めてから10年を超え，科学，技術等の分野においては多くの成果を上げている中，マスコミ業界に於いての“産学連携”はその業態の特性から，特にテレビ，ラジオ等の制作現場と大学との連携例は余り多く見る事はできない。もちろん，数々のラジオ，テレビ等の番組に出演者（タレント等）として学生が出演する例は多いが，いずれも，タレントプロダクションに所属していたり，中間業者としてプロダクション等が介在するケースがその大半を占めていると言っても過言ではない。

本学では，2学部5学科の中に「メディア・コミュニケーション学部　マス・コミュニケーション学科」を有し，更に「放送コース」というラジオ・テレビ制作を学ぶことを目的とした学生達を多く抱えるその特性から，実学としての産学連携を模索する中，2010年4月より，地元千葉における県域ラジオ放送局である株式会社ベイエフエムとの連携を図り，毎週放送の生放送番組の中に15分に及ぶ生レポートコーナーを実現。制作現場の演出担当者，構成担当者と本学学生とが密に連携を取り合いながら，年間50本ほどの番組の制作を実施している。

本レポートは，当該産学連携実現の経緯から，事前準備，2010年度実施の実績，学生たちへの教育的効果の検証を踏まえ，2011年度に向けその変化などを報告するものである。今後も検証，研鑽を重ねることで，レポートから論文への進展を図るべく研究を進めるものであり，今年度報告をⅠとし，来年度の報告をⅡとして論じる事にする。

2. プロジェクトの創設

2009年11月，県域内メディア企業との産学連携を図ることを目的とした県域ラジオ放送局株式会社ベイエフエムとの本学学生参加による番組制作及び放送に関するプロジェクト（以下，本プロジェクトと記す）は，株式会社ベイエフエム，営業局関根氏，編成制作局鈴木氏，番組演出担当太田氏，番組構成担当柳沢氏等と本学学長，メディア・コミュニケーション学部学部長，マスコミュニケーション学科学科長，入試広報課，学園本部等関連各部署との調整を行い，企画書を提出，「ベイエフエム委員会」を立ち上げる事で正式に稼働する運びとなった。本プロジェクトを実施放送する番組は株式会社ベイエフエムにて毎週土曜日午後8時より午後9時55分の2時間弱に渡る生放送番組「小島嵩弘のI'm ALIVE」で，毎回，千葉県海浜幕張駅前，WBSウエストタワー27階にある株式会社ベイエフエム本社内第4スタジオにて放送が行われている。2011年には放送開始から11年目を迎える長寿番組である「小島嵩弘のI'm ALIVE」は，パーソナリティ小島嵩弘

2011年11月25日受付
* 江戸川大学　マス・コミュニケーション学科教授　テレビメディア論

氏のトークと楽曲を中心に，地域密着型の特集コーナーを持ち，2008年3月には放送圏域内，千葉県大網白里町にある県立山武農業高校と同白里高校が統合して誕生する「県立大網高校」の校歌を小島嵩弘氏が作詞作曲し，新校舎となる山武農業高でお披露目した。完成したばかりの新校歌「萌(もえ)黄(き)の丘に」は，当該番組内での放送はもちろん，その後に民放連のラジオ教養部門の関東甲信越ブロックで優秀賞を獲得。bayfm開局20周年で初の予選突破全国の7傑に名を連ねるなど，対象聴取者である高校生の取り込みはもちろん，その親世代への影響力も誇る番組として高い評価を得ている。しかしながら，昨今のラジオ離れの現象から，株式会社ベイエフエムも広告収入の矮小化に見舞われる中，当該番組も新たな聴取者層の掘り起こしを含め，改革を迫られる時期に直面したことから，本学との連携により，大学生という新たな聴取者層への波及効果を期待し，本プロジェクトを推進する運びとなった。

一方，本学は，大学進学人口の減少が全国的に広がる中，本学受験者数の増大を図り，入学者の確保に努めるため広報宣伝活動の強化策が課題とされていた折，高校生とその親世代に対する本学の認知度を高めるための方策として，当該世代への影響力を持つ当該ラジオ番組に着目し，産学連携の新たな形として本プロジェクトの推進を実行する事となった。以下に2009年12月，本学学長に提出した本プロジェクト企画案を添付する。

実施期間は2010年4月から2011年3月までの1年間で放送回数は49回。通常1年間の放送回数は毎週1回放送のレギュラー番組の場合，年間で52回の放送になるが，本プロジェクトに関しては，年度途中にサッカーワールドカップの特別番組が編成された1回と，東日本大震災の影響で放送内容が変更になった2回の計3回の放送が無かったため，放送回数は1年間で49回となった。

本プロジェクトの実施に当たっては，2010年2月より本プロジェクトの出演学生の人選を行ったが，本学学生のラジオ聴取に対する状況は非常に悪く，ほとんどの学生がラジオ番組を聴取する習慣がない上に，「ラジオの聴き方を知らない学生」，即ちラジオ受信機に触れた事のない学生が3割近くいる状態であった。このことから，出演学生の学内公募は断念し，小倉ゼミに籍を置く，放送業界やアナウンサーを将来目指しているマスコミ志望の学生の中から希望者を募る形で出演学生の人選を行わざるを得ない状況であった。結果，本学メディア・コミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科所属の2年生から4年生までを含む，男女12名を選抜し，3人1チームとする4チームを編成した上で，各人から番組内レポート企画を複数提出させ，4週に1本の頻度で生放送番組に出演させる準備を行った。本プロジェクトに於ける番組内容に関しては，本学側から「学生達の視点を重視する」ことを前提に株式会社ベイエフエム側に企画立案を委ねた結果，当該番組演出陣より，学生達の感じた疑問を調べ，聴取者に対しその凄さを報告するという切り口でコーナーを構築し，コーナータイトルを「シラベッターラ　スゴカッターナ」とする提案を受け，これを採用する運びとなった。また，コーナー中に「江戸川大学インフォメーション」という形で，学内行事を中心とした本学の最新情報を盛り込むコーナーを建て，入学式や学園祭はもちろん，受験生獲得に向けた情報として，オープンキャンパスやAO入試，入学試験の情報を随時盛り込んで行くものとした。

毎回放送の「シラベッターラ　スゴカッターナ」は，選抜した学生達に世の中の疑問に思う題材をもとに企画を立案させることになった。担当放送日の2週間前までに番組演出陣と打ち合わせて企画を確定。その翌日から1週間かけてリサーチと取材を行い，1週間前までに構成及び台本を仕上げ演出陣に提出する。放送前週の土曜日，株式会社ベイエフエム本社にて演出陣と構成／台本のチェックと直しを行い，リサーチや取材の補足を行った上で放送日の3日前までに確定台本を演出陣に送りチャックを受ける。

以下に2010年4月分の月刊スケジュール表を添付する。

放送当日は17時30分までに株式会社ベイエフエム本社スタジオ前室制作デスクに集合し，演出

県域 FM ラジオ番組制作事業企画案

〈事業概要〉

地元県域 FM 放送局「ベイエフエム」の番組内に，約 10 分間の本学コーナーを確保し，入試広報・大学紹介などを含めた学生企画を展開することで，紙媒体依存からの脱却を図る新しい江戸川大学の広報活動を展開したい。

番組制作および出演は，マスコミ学科放送コースの教員指導のもと，学内選抜を受けた学生有志がベイエフエムのスタッフとともに行い，これにより従来の演習実習の枠を超えた実践的な教育も併せて可能になる。

〈放送する番組〉

千葉県の県域 FM 放送局「ベイエフエム」が毎週土曜 20：00〜21：56 に放送している生放送番組「小島嵩弘の I'm Alive！」に，約 10 分間の枠を確保する。内容は，江戸川大学入試の内容や日程，オープンキャンパス・入試相談会などの内容や予定，学長インタビューや学部・学科の紹介，名物教授や学生活動にスポットライトを当てたキャンパスリポートを中心とする。また学園祭や開学 20 周年の一連の記念行事等についても広報を積極的に行う。さらにバスケット部・サッカー部・映像放送研究部など部活やサークルの活動報告，入学・卒業式など四季折々の大学の動きを躍動感たっぷりに毎週伝える。紙媒体とは異なる，ライブ感あふれる「生きた広報活動」となる。

本学学生にとっては，番組の企画・構成・リサーチ・演出・出演まで，放送のプロであるベイエフエムスタッフとの共同作業を体験することで，放送に対する理解を深め，将来の放送人としての見識を高めることができると期待される。

〈番組放送計画〉

2011 年 4 月第 1 週〜2012 年 3 月最終週（計 51 回）

本学学生は 2 人を 1 チームとし，3 チームのローテーションで担当。原則として学生は，放送前週の土曜日に打合せを行い，放送週に出演する。

〈放送収録スタジオ〉

ベイエフエム本社スタジオ

千葉県千葉市美浜区中瀬 5-5-7　WBG マリブウエスト（JR 海浜幕張駅）

但し放送企画内容によって，別の場所からの放送もあり得る。

例）流山おおたかの森ショッピングセンターサテライトスタジオ
　　舞浜イクスピアリ内，スタジオイクスピアリ

追 記〈期待される広告効果等〉

＊広告広報効果

県域 FM 局に毎週約 10 分間の番組を持つことでの広告効果は絶大である。広告費換算すると年間 5,200 万円に相当する広告効果が実現できる。

（放送時間 10 分間の広告費 100 万円×52 週／年＝5,200 万円相当）

特に，当該番組は受験生も含めた若年層の聴取者が多く，本学の認知度向上により，減少傾向にある志願者数の向上が期待できる。

担当コーナー内の話題としてとりあげる形で，本学が行うイベント（例「学術シンポジウム」「講演会」「オープンキャンパス」「学園祭」等）の告知・広報を，自然に行うことができる。特に入試相談会，オープンキャンパスの日程の告知を，直前に何度も行えることは志願者増加対策上の効果が大きいと考えられる。さらに同番組のインターネット公開も行う予定で，これにより相乗効果も期待される。

＊就職支援効果

番組によって千葉県内の企業での本学に対する認知度が急速に高まる。

また番組制作に参加した本学学生は，就職活動の際に提出するエントリーシートに体験を記入することができ，メディア関連企業の採用に向けて有力な武器となる。

＊地域貢献

企画内容によっては，流山おおたかの森のサテライトスタジオ，舞浜イクスピアリのスタジオを使った放送も想定しており，これにより本学の地元に密着した活動とのイメージが醸成できる。

また番組内容で地元の話題を取り上げることも可能である。

以上のように，数千万円規模の広告効果，就職支援効果，地域貢献効果が期待できるものであり，なにとぞ学園本部のご理解ご協力を賜りたいと存じます。

メディアコミュニケーション学部　マス・コミュニケーション学科　小倉　　淳

2010	4　月	Aチーム	Bチーム	Cチーム	Dチーム
1　木		取　材			
2　金		取　材			
3　土	OA	構成／台本	企画打ち合わせ		入 学 式
4　日		追加取材	リサーチ		
5　月		追加取材	リサーチ		
6　火		再 構 成	取　材		
7　水		再 構 成	取　材		
8　木		最終台本	取　材		
9　金		最終台本	取　材		
10　土	OA	出　演	構成／台本	企画打ち合わせ	
11　日			追加取材	リサーチ	
12　月			追加取材	リサーチ	
13　火			再 構 成	取　材	
14　水			再 構 成	取　材	
15　木			最終台本	取　材	
16　金			最終台本	取　材	
17　土	OA		出　演	構成／台本	企画打ち合わせ
18　日				追加取材	リサーチ
19　月				追加取材	リサーチ
20　火				再 構 成	取　材
21　水				再 構 成	取　材
22　木				最終台本	取　材
23　金				最終台本	取　材
24　土	OA	企画打ち合わせ		出　演	構成／台本
25　日		リサーチ			追加取材
26　月		リサーチ			追加取材
27　火		取　材			再 構 成
28　水		取　材			再 構 成
29　木		取　材		江戸川ウォーク	最終台本
30　金		取　材			最終台本

陣の最終チェックを受け，サブスタジオにて学生だけでのリハーサルを繰り返し本番の準備を行う。20時から当該番組の生放送がスタート。緊張の中，準備を行い，21時05分。直前コーナー中にスタジオに入りスタンバイ。21時15分より本番生放送。21時35分前後に終了しスタジオ外へ。その後スタジオ前室制作デスクにて当該放送の同録（放送録音）を全員で聞いた後に学生達での反省会を行う。22時，本番終了後，番組演出陣との反省会を行い，22時30分解散というスケジュー

bayfm 内放送当日スケジュール

	当日担当Ａチーム	翌週担当Ｂチーム	翌々週担当Ｃチーム
17：30	集　合		
	最終打ち合わせ		
18：00		集　合	集　合
		構成／台本打ち合わせ	企画打ち合わせ
19：00	パーソナリティ小島氏到着		
	小島氏と打ち合わせ		
20：00	生放送開始	立ち会い見学	解　散
	リハーサル		
21：00	Ａチームスタンバイ		
21：15	学生コーナー生放送		
21：35	学生コーナー終了		
	同録試聴反省会	同録試聴反省会	
22：00	生放送終了		
	全体反省会	全体反省会	
22：30	解　散	解　散	

ルである。放送日の３日後にあたる火曜日に担当教授に反省文を送付し，この反省文を含んだ放送報告書がベイエフエム委員会委員全員に送付される。こうしたスケジュールをローテーションにより４チームで行う事で，担当放送日までのおよそ15日間で企画立案から放送出演までを１サイクルとして，２週間のインターバルの後に次回放送担当のサイクルに入る組み立てをおこなった。

3. 本プロジェクト実施運営

1）放送準備期

本プロジェクトスタートにあたり，番組演出陣が立案した企画ではなく，学生自身に企画立案させる事に主眼を置き，選抜した12人の学生に，1人10本以上の企画を３週間の期限を切って提出させる課題を与えた。少なからず番組制作や放送出演に興味を抱いている学生達から選抜したことから，「ラジオで喋ってみたい事」が学生達の企画書に溢れ出てくる事を期待したが，残念ながら，指定期間中に10本以上の企画書を提出できたのは12人中僅かに４人で，数本提出できた学生も含めても10人で，残り２人は期間中，１本の企画書も提出できないままに，期限を迎えてしまった。事前の希望的観測では130本以上の企画案が上がってくると考えていたものの，実際には，70本余りの企画案に留まってしまい，更に，放送に耐えうる企画に練り上げられるモノは15本程度となり，この中から各チームに企画をそれぞれにまとめさせ，番組演出陣との詳細を2010年３月末までに詰めるスケジュールを組む運びとなった。

2）集団レポート体制

2010年４月３日（土）初回放送回は，番組の新コーナーとしての内容紹介と選抜江戸大生12名全員が出演しての自己紹介パート，さらには，江戸川大学インフォメーションの説明などを行う形で本プロジェクトがスタートを切った。ここに第１回放送分報告書を学生名を伏せて転載する。

2010年４月10日（土）の第２回放送以降は，

＊＊

～bayfm『小島崇弘の I'm Alive』OA 報告書～

第１回放送報告

放 送 日　４月３日（土）20：00～22：00
　　21：15～21：35「シラベッターラ・スゴカッターナ」放送

放送内容
・初回放送コーナー紹介
・出演学生自己紹介
・今後の抱負
・江戸川大学インフォメーション

実働概要
17：30　A チーム：４月 10 日放送分　構成会議
19：00　BCD チーム全員　集合
　　全員集合後，３日放送分打ち合わせ　小島氏とリハーサル
20：00　番組放送開始　制作フロアにてスタンバイ
21：00　全員スタジオ副調整室にて OA スタンバイ
21：13　CM 中にスタジをに全員で入る
21：15　コーナースタート
21：35　コーナー終了
22：00　反省会と次週集合時間等の確認
22：30　幕張 bayfm 本社にて解散

放送後記

放送時間帯が近づくにつれ，全員が緊張感に包まれたものの，自己紹介などを含め，自主練習も重ねた結果，想像よりもリラックスした雰囲気での本番が出来たものと確信できる。番組制作関係者の評判も上々であった。

次回からの放送が本来の形になることも含め，各メンバー達のリサーチや取材を充実させることが大きなポイントになる。

４月６日現在の出演学生チーム分け詳細

A チーム	A１	マスコミ学科２年女子
	A２	マスコミ学科２年女子
	A３	マスコミ学科２年男子
B チーム	B１	マスコミ学科２年女子
	B２	マスコミ学科２年女子
	B３	マスコミ学科２年女子
C チーム	C１	マスコミ学科３年女子
	C２	マスコミ学科３年女子
	C３	マスコミ学科２年男子
D チーム	D１	マスコミ学科３年女子
	D２	マスコミ学科４年男子
	D３	マスコミ学科２年女子

OA 内容予定

４月10日 OA　A１『美脚ヨガ』＋大学 info「大学紹介＃1」
４月17日 OA　B１『ミル貝』＋大学 info「大学紹介＃2」
４月24日 OA　C１『ラーメン嫌いはなぜいない？』＋大学 info「大学紹介＃3」
５月１日 OA　D１『スゴい坂ベスト３in 六本木』＋大学 info「江戸川ウォーク」

その後の企画予定

A：A２企画「あなたの携帯ストラップ見せて下さい」
　A３企画「新しい言葉」
B：B２企画「お菓子あれこれ」
C：C２企画「いろんなアルバイト」
　C３企画「学生サブカルワールド」
D：D２企画「大学生からみた女子高生，女子高生からみた大学生」

以上がリサーチ進行中です。

2010 年４月６日　文責　小倉　　淳

＊＊

A，B，C，D各チーム毎に企画／構成／リサーチ／台本作成／スタジオ出演の全行程をチーム全員で行う形をとることとした。上記の放送報告書でも触れている様に，複数人でスタジオ出演する事で，bayfm本社スタジオという場所，プロが行う番組への出演，生放送でマイクに向かう緊張など，全ての厳しいプレッシャーを分かち合う事で緩和できるものと勘案し，基本的には3人全員でスタジオレポートを実施させた。第2回放送報告書を転載する。

緊張感の中でもグループである特性から相互に助け合う形で初回企画放送を行った様子がうかがえるが，企画立案した本人（初回はA1であったが）以外の人間がリサーチ等への関わりが，放送回数が進む度に希薄になって行く傾向がみられた。既に自らの企画が放送し終わった場合，例えば，Aチームに於いて，A1はチームとしての初回を担当すると，以降2回はAチーム担当回に出演はするが，主たる企画者ではない補助的立場となり，リサーチ等の作業に協力を怠る者まで出始める傾向が顕われた。さらに，企画力不足な学生の場合，期限内企画立案，精査の遅れから，放

＊＊

～bayfm『小島崇弘のI'm Alive』OA報告書～

第2回放送報告

放送日　4月10日（土）20：00～22：00
　　21：10～21：30「シラベッターラ・スゴカッターナ」放送

放送内容　・A1企画「美脚ヨガ」レポート（8分程度）原稿添付
　　・江戸川大学インフォメーション（2分程度）原稿添付

実働概要　17：30　Aチーム：当日放送分　原稿チェック，打ち合わせ，着替え，リハーサル
　　19：00　Bチーム：10日放送分B1企画「ミル貝」構成打ち合わせ
　　全員集合後，3日放送分打ち合わせ　小島氏とリハーサル
　　20：00　番組放送開始　制作フロアにてリハーサルを繰り返す
　　21：00　全員スタジオ副調整室にてOAスタンバイ
　　21：08　Aチーム，CM中にスタジに入る
　　21：10　コーナースタート
　　21：30　コーナー終了
　　22：00　反省会と次週集合時間等の確認
　　22：15　幕張bayfm本社にて解散

放送後記

コーナー企画としての実質的な初回放送。Aチーム A1企画「美脚ヨガ」。3ポーズの美脚ヨガを3人が自宅にて2週間，毎日実践することで，太腿などが実寸でどのくらい細くなったかを実施前／実施儀で比較。ヨガポーズの解説と体験レポートを生放送。吐き気を催す程の緊張感の中，生でのスタジオトークは，初回故に許された程度の内容だったと評価する。

ちなみに，bayfm側のスタッフは，初回にしては良く頑張ったという評価ではあったが，事前の原稿の詰めや書式，当日のリハーサルの方法，更にはスタジオ内での動きなど終了後，改善点を洗い出す作業が行われた。

江戸川インフォメーション　4月10日放送分

Aチーム：

A1　江戸川大学インフォメーション

A1　今年，開学20周年を迎える江戸川大学は，千葉県流山市駒木にある若い大学です。

A2　社会学部とメディアコミュニケーション学部の2つの学部には，私たちが勉強しているマスコミュニケーション学科を含め5つの専門性の高い学科があります。
　　現在，日本全国から集まったおよそ2,000人の学生たちが毎日，楽しく勉強しています。

A3　もより駅は2005年8月24日に開通した，つくばエクスプレスの「流山おおたかの森」。駅から大学までは専用バスでわずか5分，都心から30分余りで通えるキャンパスは，豊かな自然に囲まれた静かな学び舎です。

A1　「おおたかの森」の名前にふさわしいキャンパスですが，実はデジタル環境はばっちり整っています。学内ならどこでも無線LANが快適に繋がる環境が整備されていますし，入学等同時に学生全員にパソコンが支給されます。

Ａ２　江戸川大学についてもっと知りたい方は，インターネットで「江戸川大学」と検索してみてください。以上，江戸川大学インフォメーションでした。

実施後のＡチーム３人の放送後記

Ａ２

今日はお疲れ様でした。今日の放送の反省点など書かせていただきます。

〈良かった点＞

- 焦って早く読むことはなかった。
- インフォメーションでゆっくり読むことができた。

〈反省点＞

- 原稿をわかりやすく，伝えられるものにするのに時間がかかった。自分で気付けなかった。
- ヨガをしながら説明する，という点で小島さんに１回で伝わらなかった。ということはリスナーの人はもっと訳が分からない。
- 誰もしゃべらない間が多かった。
- 余裕がなく，小島さんやディレクターさんの目線でも指示に気づかなかった。
- 自分の読む原稿を緊張のあまり忘れてしまった。
- マイクを通しているのに，自分の声が小さかった。
- 発音がおかしいところが多々あった。（「〜でしたし，〜」というところが変に上がったりした。）
- チーム内でのコミュニケーション不足があった。

Ａチームの初回放送が終わり，言葉にでるのが「悔しい。」という一言です。江戸川大学の初の企画ものだったのにもかかわらず，小島さんとのやりとりのおぼつかなさや，間が空いてしまったり，と聞いている人には不快感や心配させるようなものだったかもしれません。私たちをむかえてくれた bayfm のスタッフのみなさんや，全面協力で支えて下さっているみなさんに申し訳ない気持ちがあります。

しかし，あの本番でちゃんと喋ることができなかったのは自分の実力なのだと実感しました。もっと貪欲に練習して，あの場できちんと伝える，ということができるようになりたいです。ヨガをやりながら，伝えるということは難しかったけれど，息がきれたりしているのを聞くことで，スタジオの様子を想像できて笑える，というラジオのおもしろさも改めて感じました。

改善点としてはＡチームの３人でちゃんとコミュニケーションをとり，原稿作りからスタッフの方とのやりとりも情報を共有し合うことです。あと，自分は緊張すると原稿の記憶がなくなってしまうので，簡潔に伝えなければならない情報をしっかり記憶することです。

余裕がなく，周りが見えなくならないようにします。

今回の反省点を，次回に必ずつなげます。今後ともよろしくお願いいたします。

Ａ１

今回初回のラジオ出演だったのでものすごく緊張していましたが，生放送を終えてテレビにはないラジオの難しさがとても良く分かりました。練習している時は普通に読めていてもいざマイクの前で読もうとすると見間違えて文をとばしてしまったので，次回作成する時は大きな文字で読みやすいように作ろうと思いました。また早口な所に気をつけてかなりゆっくり意識して読みましたが，ラジオで改めて自分の声を聞いてみたら普通の速さでした。自分の感覚と聴取者の感覚が合わせられるように練習していきたいです。そのために普段からゆっくり話せるように気をつけていきたいです。また語尾のイントネーションも変な所があったので直したいです。最初は出来なかったヨガも，出来るようになり継続することで結果はついたので良かったなと思いました。次回からは今回の反省点を活かして頑張っていきたいです。

Ａ３

初回出演ということで，緊張してばかりでした。

まず，放送までのリサーチの不足，情報の共有の不足が今回見えた課題だと思います。

原稿にする段階でもっと話し合いをするべきだったと思いました。

あと，個人的に小島さんに気を使わせてしまって申し訳ないという思いでいっぱいです。

次回からはもっと楽しく，をコンセプトとして頑張ります。

2010年4月14日　文責　小倉　淳

＊＊

送担当回に間に合わないケースまで起きるなど，学生のラジオ放送に対する適応性の個人差が顕著に見え始めた事から，このチーム制による企画出演体制を再構築しなければならない時期が，放送開始から2ヶ月を過ぎたところで訪れる結果となった。

3）個人レポート体制

初期選抜学生全員が企画立案出演を1度ずつ終えた6月末をもって，企画の採用頻度が高く，リサーチ，取材，構成，台本作成，出演にも積極的な6人を残し，それ以外の6人は，放送に耐えうる企画が提出できた場合のみ，本プロジェクトに関わる体制に切り替えることで，実質的な参加学生の第2次選抜を実施した。その結果，3，4年生が全員堕落し，アナウンサー志望の2年女子3人男子1人，演出構成志望の2年女子が2人残ることになった。4ヶ月目に入った7月からは，「シラベッターラ　スゴカッターナ」の本編企画出演担当が1人と「江戸川大学インフォメーション」の構成出演担当1人の毎回2人体制に変更した。

さらに，江戸川大学の専門性溢れる教授陣のコメントを企画の随所に挟み込む事によって，本学の特徴を本放送番組内でアピールすることで，レポート内容に厚みを持たせる試みを頻繁に行うことも推進した。ここで第17回放送報告書を転載する。

その後，構成演出希望の学生に企画立案させ，リサーチ，取材をアナウンサー志望の学生にサポートさせ，構成，台本作成は構成演出希望の学生が行い，スタジオ出演はアナウンサー志望の学生が行うという分業方式のチームを試験的に組んでみたりするなか，2人の学生が一身上の都合で離脱せざるを得ないことになり，第26回放送以降，最終的にアナウンサー志望2年女子2人，演出構成志望2年女子2人の計4人にまで絞り込まれる結果となった。

以下に2010年度本プロジェクトの年間放送企画内容一覧を転載する。

1年間，49回の放送を行った本プロジェクトで最後の4人に残った学生達が1年を振り返っての各々の感想をここに転載する。

＊＊

～bayfm『小島崇弘のI'm Alive』OA報告書～

第17回放送報告

放送日　7月24日（土）20：00～22：00
21：10～21：30「シラベッターラ・スゴカッターナ」放送

放送内容　・B1企画「金縛り」レポート（8分程度）
・江戸川大学インフォメーション（2分程度）原稿添付

実働概要　17：30　D3／B1チーム
当日放送分　原稿チェック，打ち合わせ，別スタジオでリハーサル
19：00　B2／B3チーム　集合
31日放送分湯浅企画「大学生浴衣事情」構成打ち合わせ
20：00　番組放送開始　制作フロアにてリハーサルを繰り返す
21：00　全員スタジオ副調整室にてOAスタンバイ
21：08　B1，CM中にスタジに入る
21：10　コーナースタート　曲間に高野スタジオに
21：30　コーナー終了
22：00　反省会と次週集合時間等の確認
22：15　幕張bayfm本社にて解散

放送後記

江戸川大学の教授にスポットを当てた今回の企画は，人間心理学科の福田先生に事前録音取材を御願いして放送する形となった。福田先生のご研究材料のひとつ，「金縛り」にB1がよく見舞われることから，学生100人へのアンケート調査も実施。「絶対に霊の仕業だ」と断言する学生の声も使った。

睡眠現象のひとつでほぼ科学的に証明できると仰る福田先生の解説との対比を生かしての構成は，途中，行き詰まりの多かったＢ１にしては良くまとめあげた。今回はＢ１自らの構成／取材／レポートとなったが，このチームは両方の役割を互いにこなせるところに魅力があると考える。

ここで江戸川大学インフォメーションです。

皆さん，今年が国際生物多様性年だということをご存じですか？
国際生物多様性年とは，生物の生態系を守る取り組みなどを促進していこうと決められた年です。

それに合わせて江戸川大学では７月31日土曜日，「いきものジャパンサミット」を開催します。
「いきものジャパンサミット」では生物多様性地域戦略をいち早く策定した自治体が集まり，パネルディスカッションを行い「いきもの」を主役とした皆が幸せになれる方法を話し合います。

いきものジャパンサミットが開催される場所は江戸川大学駒木キャンパス内江戸川大学総合福祉専門学校Ｆ101の大会議室にて行います。
参加費は無料となっておりますが，定員は事前申し込みによる先着順で決まった250名までとなっております。
興味のある方は，流山市環境政策課の方にお早目にご連絡ください。
また，今日24日と明日25日は江戸川大学で大学の授業などが体験できるオープンキャンパスを行っています。
皆様の参加をお待ちしています。
江戸川大学にもっと興味がある方は，インターネットで「江戸川大学」とご検索ください。

以上，江戸川大学インフォメーションでした。

放送後記

Ｂ１

今回はまず，番組全体の流れを理解して応える事が反省点です。せっかく小島さんが始めに質問してくれたのに私は，自分の原稿ばかりに気を取られて反応が返せませんでした。ふたつめに，今回オチに行くまでにリスナーさんに植え付けなければならない『恐い』という気持ちをプッシュしきれませんでした。次回の課題は小島さんが質問したことに正しく応える，また自分のコーナーだけではなく番組全体の流れを読む。そして１番ポイントになる言葉（今回なら恐い）をもっと大切に扱おうと思います。

Ｄ１

テーマの「金縛り」は一週間前に決まったものだったので正直まとまるかどうか不安もあったけれど，Ｂ１が頑張ってくれていたおかげで早い段階で形もできていて，あまり焦らずに本番を迎えることができました。内容が普通で驚きがあまりない，と太田さんに言われてましたがサウンドやインタビューの使い方などで抑揚がある話題にできたかと思います。音の重要さについても学べた日でした。今度は自分たちで欲しい音を要求してほしいとも言われましたが，実際今の段階ではそこまでできるかどうかわかりません。しかしどんどん新しいことにもチャレンジしていき，自分たちの限界を決めないで挑戦していきたいです。

Ｂ１は高度なことを要求されていて，シラベッターラスゴカッターナチームのレベルが上がっていっていることも実感しました。自分も皆に置いて行かれないように努力しなければいけないと思いました。頑張ります。今回，番組全体を把握することの大切さを知りました。うるさくしすぎていたなと，今は反省しています。すいません。

これからは番組をしっかり聞くようにし，放送中の会話に対応できるようにもしていきたいです。たくさんのアドバイスありがとうございます。

2010年７月31日　文責　小倉　　淳

＊＊＊

2010 年度 bayfm 放送企画一覧

	放 送 日	担当学生	本　編　内　容	インフォメーション
1	2010/ 4 / 3	12 人全員	コーナー紹介と自己紹介	大学総合案内
2	2010/ 4 /10	A1/A2/A3	美脚ヨガ	大学立地とネット環境
3	2010/ 4 /17	B1/B2/B3	ミル貝	教育理念「人間陶冶」
4	2010/ 4 /24	C1/C2/C3	ラーメン嫌いはなぜいない？	江戸川ウォーク
5	2010/ 5 / 1	D1/D2/D3	六本木の凄い坂	流山グリーンフェスティバル
6	2010/ 5 / 8	A2/A3/A1	携帯ストラップ見せて？！	翌週のオープンキャンパス
7	2010/ 5 /15	B2/B1/B3	大好きなお菓子の原点	佐野眞一さん記念講演会
8	2010/ 5 /22	C3/C1/C2	最近の学生麻雀事情	経営社会学科紹介
9	2010/ 5 /29	D2/D1/D3	女子高生に人気の AKB 48	人間心理学科紹介
10	2010/ 6 / 5	A3/A1/A2	学生言葉クイズ	ライフデザイン学科紹介
11	2010/ 6 /12	B3/B1/B2	ギャルソンカフェ	情報文化学科紹介
12	2010/ 6 /19	サッカー W 杯の生中継のため	放送休止	
13	2010/ 6 /26	C2/C3/C1	森ガール	マスコミ学科紹介
14	2010/ 7 / 3	D3/B1	キンボール	ファッションビジネスコース開設
15	2010/ 7 /10	B3/B2	学生アルバイト	大学図書館
16	2010/ 7 /17	C3/A2	最新恋愛ゲーム事情	オープンキャンパス情報
17	2010/ 7 /24	B1/D3	金縛り	いきもの JAPAN サミット
18	2010/ 7 /31	B3/B2	浴衣事情	オープンキャンパス情報
19	2010/ 8 / 7	A2/C3	幽霊	携帯韻文コンテスト
20	2010/ 8 /14	D3/B1	動物珍名大百科	大学窓口夏期休暇
21	2010/ 8 /21	B3/B2	レギンス男子	オープンキャンパス情報
22	2010/ 8 /28	A2	骨	高校放送コンクール募集
23	2010/ 9 / 4	D3/B1	リカちゃん人形	ニュージーランド研修
24	2010/ 9 /11	B3/B2	ミス・インターナショナル	立石フェスタ報告

25	2010/ 9 /18	A2	秋の行楽ならおっぱいプリン！	日本健康心理学会
26	2010/ 9 /25	B1/D3	大奥，男女逆転	オープンキャンパス情報
27	2010/10/ 2	B3/B2	江戸川ガールズコレクション	高校放送コンクール開催予告
28	2010/10/ 9	B1/D3	ラジオ焼き	高校放送コンクール開催予告
29	2010/10/16	D3/B1	高校放送コンクール予告	学園祭＆オープンキャンパス
30	2010/10/23	出場高校生	高校放送コンクール SP	学園祭＆オープンキャンパス
31	2010/10/30	B3/B2	江戸川ガールズコレクション	学園祭＆オープンキャンパス
32	2010/11/ 6	B3/B2	生ドーナッツ	学園祭報告
33	2010/11/13	D3/B1	野球拳	オープンキャンパス情報
34	2010/11/20	D3/B1	ハリーポッターの秘密	携帯韻文コンテスト報告
35	2010/11/27	B1	食べる○○○○	特待生制度導入
36	2010/12/ 4	B3/B2	もてもて Xmas	小島さん特別講師予告
37	2010/12/11	B1/D3	方言で口説く	小島さん特別講師報告
38	2010/12/18	D3/B1	KAGEROU に見る学生読書事情	奨学金制度紹介
39	2010/12/25	B2	寂しい Xmas	卒論提出
40	2011/ 1 / 1	全員	お正月福袋	休止
41	2011/ 1 / 8	B1	成人式	入試案内
42	2011/ 1 /15	B3/B2	サイエンス男子	センター入試
43	2011/ 1 /22	D3/B1	山ガールは本当にいるのか	学生寮
44	2011/ 1 /29	B2	イケメン男子はダウニー好き	学長からのメッセージ
45	2011/ 2 / 5	B3	雪山ナンパ事情	一般入試
46	2011/ 2 /12	B1/D3	バレンタイン・キッス	進学相談会
47	2011/ 2 /19	B1	雪下ろしボランティア	一般入試
48	2011/ 2 /26	D3/B1	かばん，重くない？	立石フェスタ
49	2011/ 3 / 5	B3	高校卒業式，その後は？	東海道五十三次
50	2011/ 3 /12	特番対応	東日本大地震で，放送休止	休止
51	2011/ 3 /19	番組内容変更	大震災対応で放送内容変更	休止
52	2011/ 3 /26	全員	1 年間振り返り	保育園開園

bayfm「シラベッターラ・スゴカッターナ」を振り返って

アナウンサー志望マスコミ学科２年Ｂ１

〈初めに〉

2010年２月13日に「アイムアライブ」のスタッフの方たちとの初めての顔合わせがありました。

その時にディレクターさんから「番組を作る作業は，想像とか妄想とか頭にあるアイディアをメディアに適した形に変換していく『開通作業』が必要。その技術を身に付けなければならない」と教わりました。今でもそれはよく思い出されますし，この１年うまく出来たかは別ですが，常に念頭に置いていた基礎になっています。

当時の日記には「緊張と期待で心臓吐きそう」と書かれています。

①緊張　②内容　③しゃべり

〈初期〉 Ｂチーム時代

４月17日 「ミル貝」
５月15日 「お菓子（メルス）」
６月12日 「ギャルソンカフェ」

①「ミル貝」の時はＢチームとして初めてのオンエアであり，自分が企画した内容だったこともあり，心臓を吐きそうなほど緊張していたのを覚えています。しかしそれ以上に「自分がネタでやらせて頂ける」という嬉しさの方が勝っていたのも確かです。特にＢチームの中では最初にネタを取り上げて頂けたという事で自分自分の自信にもなりました。

「お菓子」と「ギャルソンカフェ」では岡田と湯浅のそれぞれの企画だったので，彼女たちのサポートに回ろうと必死でした。連絡を取り合っているつもりでも上手く意思疎通が出来なかったり，うまく役立てない事もありました。チームでコーナーを成功させようとする一人では味わえない緊張感を覚えました。

②特に初回の「ミル貝」は無邪気に好きなものを主張したらネタとして拾って頂けたというのが正しいです。もう一つ今さらですが「私自身がミル貝になる」という構成は，夢で見て，それを実際に柳沢さんに言ったところ拾って頂けました。本当に運が良かったと実感しています。

「お菓子」はＢ３が頑張ってくれたこともあり，「メルス」の実物をスタジオで出すという事が出来て良かったと思います。

「ギャルソンカフェ」に関してはＢ２が紆余曲折を経てたどり着いてくれたネタだったと今も思います。とても悩んでいたのはそばにいてとても実感していました。そんな中で初めてボイスレコーダーをまともに使用しインタビュー素材を使ってのコーナーになったのはとても誇らしかったです。今思えば使い方も録った素材も散々な出来でしたが，当時の精一杯だったのだと思います。

③「ミル貝」は構成が特殊だったのと，初回という事で小島さんも気を使ってくださり，私たちに「とにかく話させる」という形になっていました。なので今聞いても割とスムーズに内容が進んでいたように感じます。

しかし「お菓子」の時に初めて「会話」を重視して伝えなければいけないことを実感し，オンエアまでの数時間は死ぬ気で練習したのを覚えています。特に伝えることを全て台本にして話すのではなく，言葉のキャッチボールになるように伝えるように頑張ったのを覚えています。

〈中期〉 ６人編成時代

７月24日「かなしばり」
９月25日「男装女装男女逆転」
10月９日「ラジオ焼き」

①６人に編成され，特に私とＤ３はひとりひとりが構成と話し手の両方をやって良いという事で，実質の一人立ちでした。なので「頼る人がいない」という緊張感が常にありました。しかし自分の書いた台本を自分の伝えたいように表現できるという楽しさもありました。なのでこの時期にやった放送が今でも特に自分の中では気に入って

います。

②「金縛り」は，最初はどうしたら良いかと悩んだものでした。しかし福田先生の協力もあり自信を持って伝えられる内容になっていたと思います。

「男装女装」は自分の大好きな恋愛漫画を取り上げることが出来ました。初めて自分の分析で構成を作ることができたのも嬉しかったです。1日1冊恋愛漫画を読んでいて良かったと実感しました。

「ラジオ焼き」は当時，部活の屋台のラジオ焼きを連動させて，小さいですが立体的な宣伝活動がやりたかったのがネタにしたきっかけです。ですがその私の小さな立体プロジェクトを友人に話したところ鼻で笑われました。悔しかったです。だからネタ出しをし，OK が出た瞬間「勝った」と思いました。私の負けず嫌いが生んだ「ラジオ焼き」だったというわけです。

③伝えたい内容に自信があったからこそ，それを伝える喋りの技術のなさに特に悔しんだのがこの時期です。オンエア前にたくさん練習に付き合っていただいたのに，最終的に躓いてしまう事が多々ありました。

〈後期〉 4人編成時代

11月6日「生ドーナッツ」 11月27日「食べる〇〇でモテレシピ」
12月11日「方言告白」 1月8日「成人式」
2月12日「バレンタイン・キッス」

①緊張というか精神的に大変だったのがこの時期です。ベイエフエム以外でダメージを食らう事の多かった11月後半から年明けは特に厳しかったです。スタジオで笑うのがとてもしんどかったです。

②上記した通りで，好きな事をやらせて頂いているのに身体的にも精神的にも追いつかず，内容も胸を張って伝えられるものにならず悔しかったです。

特に「方言告白」は先に考えていた「伊達男」を直前になって内容から削除したのですが，個人的にはそちらをプッシュしたかったのが本音でした。しかしそれをオンエアで使えるだけのネタに出来なかったのがとても自己嫌悪でした。

そんな中で自分でも力を入れたのが「バレンタイン・キッス」です。事前に東京に取材に行き，最終的に213人に協力をして出来上がったデータだったので，ネタには自信がありました。

③「タメ口」を治すように現在進行形で心がけています。

「バレンタイン・キッス」の回ではネタに自信があった分，最後のテニスの王子さまの紹介でうまく伝わらず落ち込みました。

＊＊

bayfm 78 ラジオ反省

アナウンサー志望マスコミ学科2年B2

①　シラベッターラスゴカッターナ！　を初めてやった時

とにかく緊張とわくわく感でいっぱいだった。

企画や構成に関して，ネタがありきたりすぎたり，真面目すぎるという理由で採用されないことが多く，苦しんだが，番組を考えると逆に明るく楽しい話題をテーマにリポートできたので良かった。

ひとチーム三人いたので，なにかと心強かった。

この時フリートークはまだ恐れていて，自分のセリフだけで必死だった。

②　体制が変わり6人で担当するようになった時

雰囲気もがらりと変わり精神的に余裕がなかった時期。

三チームにわかれ，私はピチピチ女子大生キャラの喋り手で原稿はB3が担当することになった。

この時期一番苦労したのが「ネタ」だし。

今までは季節に関係なく，調べたいことをネタとして調べていたが，季節や，私のキャラを考えてネタを決めなくてはならなかったのでネタが決まるまで苦労した。
この時も耳にたこができるほど真面目だといわれ，真面目だといわれる事が一番といっていい程嫌いな私にとってはつらかった時期。
一対一で喋るとなると緊張もしたし，自分のリポートに夢中で相手が話している言葉も落ち着いて聞けず，相手の言葉をスルーしてしまうことが多かった。
自分がだめなのがよくわかっているからこそ，放送直後の反省会が嫌で仕方なかった。

③　現　在
ひとチームが抜け，気づけば４人で担当することに。
原稿も喋りも全て自分一人でやることに。
はじめは不安な気持ちもあったが，案外ひとりの方がやりやすいという一面もあった。
なかなか慣れなかったラジオだが，最近では小島さんとも話す機会が増え放送日までは大変だが，放送日が若干楽しみになるようになった。

それはきっといつも支えてくれる家族や友人のおかげであり，時に厳しく時に優しく見守ってくれている先生のおかげだろうと思う。
プロと一緒にラジオ放送ができるなんてそうそうない。
この機会を与えて下さった大学に感謝してこれからも放送に励みたい。
＊＊＊

ラジオレポート

構成作家志望マスコミ学科２年Ｂ３

シラベッターラスゴカッターナを初めてやった時，私たちの班は同学年の女子３人でやっていました。この時は，まだ勝手がよくわからずとにかくやってみるという感じでした。
企画もとりあえずやってみるものが多く，今思い返すと本当にお楽しみ期間だったんだなぁと感じました。
小島さんとの絡みを指摘されたのもこの頃からでした。
小倉先生に，「空いている時間に，なぜ小島さんと話さないんだ」と言われ，積極的にコミュニケーションをとるようになりました。おかげで放送中に，少しですが軽い雰囲気で話す事が出来て，やりやすさを感じました。
原稿を見返してみると，フォントのサイズもバラバラで見にくい上に，挨拶や自己紹介も書かれていて本当に原稿に頼っているのがわかります。
それでも自分の声が公共の電波に流れているのが嬉しくて，とにかく元気にやるという気持ちでした。
放送中の小島さんはものすごくテンションが高いのに，マイクを離れると大人しい性格になるのには驚き，これがプロなんだなと思いました。

体制が12人から６人に変わった時，先輩達の分と同級生の分も頑張ろう！　と思った反面，「ここからはお遊びじゃないから」と告げられ一気に厳しさを感じました。
Ｂ２とチームを組み，「キャピキャピしたネタを持ってくる」という条件を出され，すごく苦労しました。自分自身，女の子が好きな物が得意ではないため何をチェックしたらいいのかがわからなくて図書館の雑誌とにらめっこしていました。
この時に話し手と書き手に分かれてやるようになり，Ｂ２をいかに「派手で元気な女子大生キャラ」にするかが求められて，さらに悩んだ時です。
元気な女の子言葉で，Ｂ２が嫌味なキャラにならないように，かつ情報もきちんと伝える，という事を悶々と考えながら原稿を書いていたら堅苦しい普通の文章になっていました。しかも長い。
Ｂ２にも「ここはこうして」と言ってもらいつつ書いていましたが，キャラを作り上げるという事は非常に難しい事で，なかなかうまくいきませんでした。うまくいかないまままたメンバーが変わってしまったので，いつかリベンジしたいと思っています。

学祭の宣伝でくみっきーにインタビューする事がありました。

くみっきーとの交渉はどうしたらいいですか？　等，何から何まで先生に聞いていましたが，自分で考える事をしろと注意されました。確かに質問多すぎでした。

経営学科の中口先生に協力していただき，タレントの事務所と自分で連絡を取り合い，インタビューする内容や日時を決めました。

取材のお願いをするのは，カフェや他の先生などで慣れていたと思っていましたが，この時は芸能人の事務所とのアポイントを取ったということで非常に緊張していました。

電話の対応をきちんとしていないと，自分だけではなく大学にも泥を塗ってしまうので細心の注意を払っていました。毎回お腹が痛かったです。

芸能人にインタビューして華々しく学祭を盛り上げていこうとしていましたが，原稿がちっとも面白くないとダメ出しをもらいました。

ディレクターさんはいつもシンプルにメールを返してくれて，ここはどういうこと？　とかここがおもしろくない。と短文が多かったのですが，タレントの原稿を書いた時は今までの中では一番長文で「お前の文章は全然面白くない。学祭を盛り上げようという気はあるのか？」とメールをいただきました。正直ものすごくショックで，全てを投げ出したくなりました。

怖い思いでスタジオに行くとディレクターさんが笑顔で迎えてくれたのでほっとしましたが，「学校からお願いされている限り，君は，学祭がどれだけ楽しいかとアピールして，いろんな人に来てもらえるような放送をする義務があるんだ」と言われ，自分がどれだけ重要なポジションにいるのか思い知らされました。ラジオと言うメディアを通して，私のできる限りの表現で「学祭はこんなに楽しいし，すごい事をするんだよ！」と伝えなくてはいけないと，求められているものがバーッと見えて来て，大きな事態にドキドキしました。

そこから持ち直して，何とか放送に間に合うようにはしましたが，全体的にパッとしない感じで終わったと思います。アピールに失敗しました。

人に伝えるというのは自分が面白いからここを使おう！　と思っても他の人には何て事のない情報だったりして，選別するのがとても難しいです。

読むのが自分ではないので，どういう感じで読んで欲しいか，書いてある大まかな内容などの話し合いもＢ２としていましたが，そこもチーム内でうまく伝わらない事があり苦労しました。Ｂ２のパッと明るい声が活かせないのは本当に悔しかったです。

いくら気をつけても文章に抑揚がなく，平たんで普通なものが出来上がるのがほとんどでした。

また編制があり今度は４人で回すことになりました。

担当が早くなって大変ですが，何よりも一人でやることが大変です。

インタビューも一人で撮りに行き，企画構成，原稿，話も自分でやるというのは慣れていなかったのでてんてこ舞いでした。

ひとりになって，放送するジャンルが何でもいいようになり，自分の得意なものを企画してみたら，それは簡単にできました。得意なものだから聞いてほしい事がどんどん出て来て原稿も放送も自分ではまあまあうまく行ったと思っていました。

次の週で地獄を見ました。正月放送でいきなりお説教を頂きました。今思い返してもなんであんなに気を抜いていたのだろうと思うくらいひどい放送でした。公共の電波でみんなに聞いてもらうという事を忘れていて，校内放送レベルでした。

続けて，自分の放送。これも地獄を見ました。

原稿内容も打ち合わせの時点で完璧に決まっていない状況でしたし，原稿もインタビューも雑でした。放送もうまくいかず一番大事なところでつっかえました。

１年やっているのに，原稿にばっかり気を取られているんだなぁと思うと今までの事は何だったのか？と情けなくなりました。原稿を目で追うのではなく，伝えたい事を頭に入れていれば，小島さんと会話しながら放送ができるという事はずーっと言われていたことなのにそれが出来ませんでした。

今までと人数ややり方が変わり，来年度からは後輩も入ってきます。

地獄が続いてるままだと先輩としてどうしようもないので，気を抜かずに活を入れて取り組んでいこうと思います。

シラスゴレポート

演出構成志望マスコミ学科２年Ｄ３

①　初めてシラベッターラスゴカッターナをやった時…

私は初めの集まりからは参加していなかったので，わからないことが多く，とても不安だったことを覚えています。

ネタの考え方，企画の立て方，原稿の作り方…今までやったことのないことで何一つやり方がわからず，一番初めに作った原稿は何回も何回も見直し一字一句，表現の間違いはないかどうか自分なりに研究しながらやりました。

通常どんな風にラジオの放送を行っているかもまったく知らなかったので，初めて見学させていただいた時は，すぐ近くでプロの現場を見ることができたことにとても感動しました。

先輩の「六本木の坂」のネタで初めて放送に参加させていただいた時は，放送前のリハーサルの時にぼろくそに言われ，落ち込んで放送に臨んだことを覚えています。

私の話す部分はそんなに多くはなかったのですが，とても緊張していて正直よく覚えていません。当時は内容を「伝える」ということよりも原稿を正しく「読む」ことに必死でした。今考えると，本当に失礼なことをしていたと思います。すいません。

私自身はそれまでマイクの前にたつことなどなかったので，本番でとんでもない失敗をしでかすのではないかとそればかり心配していました。それぐらいとても緊張していたので，なんとか本番を終えた後はとりあえずマイクの前にたって生放送を迎えても，頭の中が真っ白になってパニックを起こさない，ということがわかってそれだけでホッとしたものでした。

シラベッターラスゴカッターナに参加させていただく時，ラジオの構成に興味はあってやりたい！　と思っていたのですが，自分が喋ることにはまったく自信がありませんでした。３人組みのチームだったのでできるだけ自分の喋る部分を少なくしようと，密に考えながら構成をたてていた気がします。

②　体制が変わり人数が６人になった時…

人数を減らし体制を変えてシラスゴをやると聞いた時は，あまりにも突然すぎて正直心の準備ができていませんでした。自分の名前が呼ばれ６人の中の一人に選ばれた時は，途中から入った私が残っていいのか？　と少し思ったりもしましたが，残ってシラスゴをやれることをとても嬉しく思いましたし，また初めてこの時プレッシャーにも感じました。それまでは先輩二人と同じチームだったので，心のどこかで何かあったら頼ろう，と常に考えていて放送に対するプレッシャーは感じていませんでした。

人数が少なくなり自分の位置がはっきりしたことで，その時初めて自分のいる環境を自覚しました。滅多にできない体験を大学のおかげでさせていただいていること，生放送なので失敗は許されないこと，放送が電波にのって繋がる責任があることなど…。

今まであまり意識せずにしていたことが急にはっきりと，また恐くも見えてきて気持ちがぞわぞわしたことを覚えています。

Ｂ１との二人組になって，「変態」というテーマでネタを探すよう言われた時は，テーマがある方がネタを絞りやすいしいいと思いましたが，自分がもっと「喋る」ポジションになるよう言われた時には，初めの時に感じたような不安，恐さを再び感じました…。でもシラスゴを続けたいと思う以上，どこかでこの壁を乗り越えなければいけないなとこの頃強く決心しました。

マス塾に入っているＢ１からはいろいろな話を聞くことができて，知識が少ない私にとって一緒にやれることはとても勉強になり，為にもなりました。それからは企画の立て方，原稿の作り方などなんとなく皆のマネをしながらつくるようになり，少しずつですが慣れることができました。Ｂ３やＢ２からも人数が少なくなった分近い存在として話をたくさんすることができて，楽しく放送に参加できるようにもなれました。

この頃の構成は，ボイスレコーダーを使ったインタビューなどはせずに，電話で尋ねた情報やインターネットの情報を中心に作成していました。「変態」ネタは名前それだけでインパクトがあるので，他のネタよりもつくりやすく感じていましたし，ネタ出しなどに苦労する思いもあまり感じていませんでした。が，何度かネタ出しを重ねていくうちに，これといったネタが見えなくなりここで初めてネタ出しの苦労を思い知りました。とにかくインパクトのある名前のものを探す，という方法でネタ出しに臨んでいましたが，「リカちゃん人形」のときのように名前だけで，中身が薄いネタもあったりしてそれだけでは駄目だということも知りました。

放送ではまだまだ「伝える」領域に達しておらず，初めの頃は小島さんとのやり取りのみに神経を集中させ放送を行うことを目標にやっていました。毎回ひとつひとつ自分の中で課題をたて，それを達成するべく努力するようにしていましたが，ある時自分が立てた課題だけに臨んでいてもいけないということに気付かされました。周りの人が自分に望む放送ができるようにならなければと思ったのです。私に何を期待してどんな放送をしてほしいのかを常に考えて行動するように心がけるようにしたのですが，考えすぎてわからなくなったり自分のしたいことが見えなくなったりしたこともありました。何を最優先にして考えていくべきなのか…自分が楽しくやることが大事！と，この時は結論づけました。

③　今…

最近になってやっと本当の構成の難しさがわかったような気がします。原稿を作りこむ大切さや，リスナーに伝える手段，小島さんとのコミュニケーション，インタビューの仕方，練習…やるべきことは山ほどあります。一つのことにとらわれて周りが見えなくなることは，良くないことです。いつも助けてくださる人たちに，応えられる放送がしたい！　と今，強く思っています。

本番で緊張はほとんどしないようになりました…というより緊張とうまく付き合えるようになれました。それは，今まで放送を重ねてきた経験と続けてこられている自分への自信からだと思います。

企画・構成では今までよりも細かい部分にも気を配れるようになり，原稿を書くことにも以前よりだいぶ慣れることができました。ただ，慣れることばかりで次のステップに進むことがまだまだできていないので，今年はその部分を向上できるよう努力したいです。

放送では原稿を進めていく上での要領のようなものは分かってきたような気がしますが，自分の言葉でリスナーに「伝える」技術をこれから身につけたいと思います。

必要な言葉，不必要な言葉の判断を即座にできるようにし，もっと判断能力を高めたいです。

＊＊

4. 本プロジェクトの効果検証
── ラジオ放送を通じての対外的効果 ──

本プロジェクトの実施による対外的効果で特筆すべきは，本学 AO 入試を受験する高校生の中に，「bayfm の番組を聞いて江戸川大学を選びました。」という高校生や，「江戸大に入って bayfm で喋ってみたいです！」という高校生が実際に増え始めている事ではないかと分析する。株式会社ベイエフエム自体は，千葉の県域 FM 放送局ではあるが，受信可能領域は，南は静岡県の海岸地域から北は福島県南部地域までと広域に渡り，特に関東の東南地域における影響力は決して小さく評価されるものではない。また，本プロジェクトのコーナーである「シラベッターラ　スゴカッターナ」には，面白ければ興味を持った聴取者からのメールや，学生達の緊張ぶりを耳にした際には応援のメッセージも届く様になり，年間を通じての展開の成果として「江戸川大学」を周知する効果から本学のブランド力アップの一翼を担っていると評価されるものと考えたい。

また，学園祭での江戸川ガールズコレクションなど学内行事の集客はもちろん，オープンキャンパス，入試説明会など，本学受験者誘因の効果も徐々に顕われていると評価できる。また，学生達の教育的効果としては，本文内に転載した学生達の反省レポートから見られるような，番組制作に対する真摯な姿勢を育て，物事に対する好奇心や分析力，更には伝える事の重要性を理解する事での「発・信・力」の育成に大きく寄与していると考えられる。また，次年度入学学生を含む下の学年に対する教育的伝承を感じさせる展開が期待できるものと評価する。

本レポートは 2010 年度の 1 年に渡る本プロジェクトの総括であると同時に，2011 年度に繋がっての対外的効果や教育的効果の検証を分析する論文としての発展を見据え，Ⅰと本文タイトルに明示する形をとった。来年度の紀要には本プロジェクトに関するレポートの第 2 弾としてⅡを寄稿させて頂きたいと考えている。